

写本系「山路の露」について

本位田 重 美

一

かつてわたくしは、「山路の露」の作者が建礼門院右京大夫ではないかという意見を⁽¹⁾発表したことがある。そのような考えを持つようになったのもっとも大きな理由は、「山路の露」の用語や文体が「右京大夫集」のそれと酷似しているということであった。ところで、その際比較に用いた「山路の露」のテキストは統群書類従本であったが、実は、既に知られているように、「山路の露」には統類従本(微細な異同はあるが、板本も同系。以下この系統のものを刊本系と称する。)の外に、これとかなり大きな異同を持つ写本が流布しており、これらの間の系統関係を調査して統類従本の性格を明かにしないかぎり、前稿の論旨はなお完成しないことになるであろう。右のようなわけで、その後「山路の露」の写本には注意を払ってきたのであるが、今日までに調査し得たものはまだ次の数種に過ぎない。しかし、これだけでもある程度の結論は導き出せそうに思うので、いちおうここに報告しておくことにしたい。

一 架蔵甲本(鳥の子紙胡蝶装写本一冊。墨付五五丁。奥書なし。「架甲」と略称する。)

写本系「山路の露」について

写本系「山路の露」について

一一

二 架蔵乙本（鳥の子紙胡蝶装写本一冊。墨付五七丁。奥書なし。「架乙」と略称する。）

三 青谿書屋旧蔵本（日本古典全書「源氏物語七」に付載。「右本仮名遣以下雖無正躰引直卒写之猶落字誤等可改之 玖山翁（花押）」という奥書がある。玖山翁は九条植通である。原本未見。青本と略称する。）

四 書陵部甲本（写本一冊。墨付七五丁。奥書なし。「書甲」と略称。）

五 書陵部乙本（写本一冊。墨付三五丁。奥書なし。「書乙」と略称。）

ただし、四と五は写真によって調査した。なお、右のうち一―四はここにいう写本系本文を持つものであり、五は刊本系本文を持つものである。

二

写本系と刊本系とは多くの顕著な異同があるが、そのうちもっとも大きなものは次の箇所である。左に写本系の代表として架蔵甲本を用い、その本文を続類従本と対照して示すことにする。

続類従本（四三六頁）

架蔵甲本

④ あるまじのことやとはきゝ給ながら、たゞうちなき
給て、いぶせきはげに中々なるべけれども、かゝる
さましたる人は、わざとだにたづぬべき山のおくを
わけ出て、人めしげきすまひはうたてあらんと、い
ひまぎらはして、うちそむきたまへるかたはらめ、

あるまじのことやとはきゝ給ながら、たゞうちなき
給て、いぶせき也。げに中々なるべけれども、かゝ
るさましたる人は、わざとだにたづぬる山のおくを
わけ出て、人めしげきすまひはうたてあらむと、い
ひまぎらはして、打そむきたまへるかたはらめ、あ

いひしらずをかしげなるを、いとどかなしと思へり。みやこ

⑧

とても、なにかさのみ人めしげう侍らん。ことさら山里びてつくらせ侍べきなど、御心につくさまにきこえなすも哀なり。さまざまなるきぬあやなどもたせたりける、とりいでて、姫君の御れうはさらにもいはず、尼君にも所せきまで奉りたれば、又なき身によるこびさはぎて、物さびしき尼君どもなど、めさめたる心ちなんしける。うこんもやがて立とまらまほしく思ひたれども、かばかり心ばそきすまひにたへこもりては、いかにしてすぐさん、いとあるまじきこととの給ひて、

あらぬ世と思ひなしつる山のおくになにたづねきて袖ぬらすらん

との給へば、

立かへるなごりだにかくかなしきにながきわかれとおもはましかば

ときこえて、いみじう思へり。道すがらみるそのあ

ひ行づきいひ知ずおかしげなるを、いとどかなしとおもへり。都

にもたれかはしりきこえんなどいひて、尼君のかたへつきせぬことどもを返々うれしくも有がたくもさまゝ思ひみだれ侍、いかさまにもかさねてやま路わけ侍らむおりぞ心しづかになどいひ入たる。あまぎみ、さらぬ尼たち、哀におしく悲しと思ひたまふらんこゝろのうをしはかれて、みなすみ染の袂露おきわたす。かゝるめづらかなることはまたも有やせむ、さまさまおもひかけぬ人々分させたまふにぞ、山路のめいばく有心地して、おなじう今一入などかと思ふなむわりなきとぞきこへいでていざり出たまふ。かたみにしほたれたまへる袖のけしき、いとるみじう、はるばるとわけ給し道のほどもさながらうつゝとおおぼえず。うれしともあさましとも、今ぞかの物のけいけむ事、あま君のかたりたまひし初瀬の御しるべも有がたくおぼえて、なきみわらいみ右近とかたりて歸たまひぬ。姫ぎみはなごり

たりの山さへ、かすかにとをうなるまゝに、いとど心ぼそくて、かしこには又なごりかなしくて、ながめ給ふまぎらはしに、君は例のごやの

◎ をこなひに心入給べし。うこんはそのくれに殿へまいたりたれば、れいよりも人ずくなにしめやかにて、はしつかたにみすまき上て、ふえふきすさびつゝ、おはします程なりけり。ごたちと忍て物いふけはひをきゝつけ給て、とりわきめし出て、いかになどとひ給へば、ありつるさまあさからずきこえなして、かのなにたづねきてとの給つる、口ずさみもかたり聞ゆれば、げにさぞ思らんと、あはれにてうち泪ぐまれ給。

もこひしく打ながめて、さま／＼成ける身のありさまおぼしづけて、なをさめやらぬ夢のこゝちし給にも、よろづをそぎすてゝ

おこなひをこゝろに入給ていとゞし給。うこんは其くれほどに殿へまゐりたれば、れいよりも人ずくなにしめやかにて、はしつかたにみすまきあげて、笛吹すさびてをはしますほどなりけり。ごたちと忍びて物いふけはひをいとゞ敷聞つけたまひて、とりわきめし出て、いかになどとひたまへば、有つるありさま浅からずきこえなして、彼なににかうさのたづねきてとのたまひしくちずさみもかたりきこゆれば、げにさぞおもふらんと哀にて、うち涙ぐまれたまふ。

右は、小野の里に浮舟をたづねてきた母君と右近が、浮舟に帰京をすすめるくだりに続く部分であるが、㊦になつて、刊本系と写本系は全く違った文章となつてゐる。どちらかが改訂されたものと思われるが、さてどちらが古い形を伝えているのであろうか。

この問題を解く鍵が一つあると思われる。池田亀鑑氏(2)がすでに指摘しておられるところであるが、㊦の部分に「かのなににかうさのたづねきてとのたまひしくちずさみ」とあるのがそれで、この部分、殊に「うさの」という語は、

このままでは全然意味が通じない。写本系の書甲本には「かのなににかうたづねきて云々」とあり、これなら「うさの」については問題が解消するけれども、それでも「かの」が何を受けているのか、やはりわからない。ところが、刊本系によると、ここは、「かのなにたづねきてとの給ひつる口ずさみ」となっており、浮舟の歌の「なにたづねきて袖ぬらすらん」を受けていることは明かである。とすれば、写本系の「なににかうさのたづねきて」は刊本系の「なにたづねきて」を誤り伝えたものではないであろうか。そう考えることもあながち無稽のことではないように思われる。では、写本系に「にかうさの」という衍字がなぜ生じたのか。もちろんわからないことであるが、思うに、⑧の部分に贈答歌のない写本系では、「かのなにたづねきて」が何を受けるかわからないために、誰かが「かのなに」の傍に、たとえば「かうしも敷」とか何とか註記しておいたものが、註記に誤写を生じ、さらに本文に混入して「にかうさの」となった、というような事情も考えられるであろう。ともかく、写本系の本文を誤りとすることが認められるならば、⑧の部分に浮舟と右近との贈答歌の載せられている刊本系の方が古い形であると見なければならぬであろう。

三

それにしても、なぜ写本系は、これという不合理もない刊本系の本文を改めなければならなかったのだろうか。その点について一つの示唆を与えてくれるのが、書乙本の存在である。書乙本は、左に掲げるような欠陥を持っているので、本文としては決して善本とは言えないけれども、この両系統の成立を考究するにあたっては、貴重な資料を提供するものと思われる。

(一) 初めの部分に錯簡⁽³⁾がある。続類従本によって示すと、四一四頁上段七行の「おぼし給ふ(書乙本にはこの句がなく、「大将殿の御かたには宮のうへ……」となっている。)以下四一五頁上段二行の「おくにむかひる給へるさま(書乙本、おくにむかひてゐたまへるさま)までの五五六字と、四一五頁上段二行の「わかくをかしげ(書乙本、わかふをかしげ)」以下四一五頁下段一二行「すぐし給、さる(書乙本、すぐしたまふさま)」までの五一四字とが入れ換っている。

(二) 後半部に脱落がある。すなわち、前掲⑧の部分(四三六頁下段三行から四三七頁上段六行まで三四二字分)が脱落しており、前後の続きは次のようになっていいる。

……人しげきすまひはうたてあらむといひまぎらはしてうちぞむきたまへるかたはらめいひしらずをかしげなるをいとゞしくかなしとおもへり宮こ□のおこなひに心入たまふべし

「宮こ」の右傍には「ほんのまゝ」といふ註記がある。□は「升」の草体のような字が書いてあるが、おそらく「後夜」の「夜」の草体の誤ったものであろう。

(三) 末尾に近く脱落がある。四四〇頁上段一行「出入なにやかやとしける(架甲本、出いりなむをやくとしけり)」と「のどやかなる夕つかた」との間に、写本系には次のような文がある。今、架甲本によって示す。

あまきみも明くれみたてまつりあつかふをこそ此世のなくさみ山さとのひかりとおほしつるをいみしき御とふらひとともに御くにのやまにあまるはかりなるにこちたきまでほとけはかの世このよをたすけ給ふとも思ひしる。

ただし、この欠脱は刊本系共通のものであるから、かならずしも書乙本の持つ欠陥とは言えない。後述のように、写本系の補入と考えることもできるのである。

以上のうち、ここで問題になるのは(二)である。この脱落が前掲⑧にびったりあてはまるということは、次のような想像を起させるに足るものであろう。すなわち、刊本系に書乙本のような脱落を持つものが生じたために、後人がその部分に補筆を加えたものが写本系本文ではないであらうか、と思われるのである。

以上のような推定が許されけるとすると、好都合なことがいくつかある。たとえば、⑧の部分の異同についても、刊本系では、浮舟や尼君たちに対する贈り物、浮舟と右近との和歌の贈答など、事柄を中心として叙述が進められているのに対し、写本系では、尼君との挨拶のやり取りや帰京にあたつての感慨など、悪く言えば記事としての内容の乏しいことも、刊本系本文の欠脱を、前後の關係を見ながら無理のないように補筆したと考へて始めて納得できるのではなからうか。刊本系本文を目にしながら、このような改作が行なわれようとは、とうてい考へられないのである。

また⑧の初めの部分の「都にもたれかはしりきこえん」という尼君のことばも、浮舟が「かゝるさましたる人は、わざとだにたづぬる山のおくをわけ出て、人めしげきすまひはうたてあらむ」と、出家の身として人目繁き都に出ることをそれとなくこぼんだことに對する返事としては、見当外れだと思われる。刊本系のように「みやことでも、なにかさのみ人めしげう侍らん。ことさら山里びてつくらせ侍るべき」というような応答であつてこそ、母君の切ない氣持も現われるのである。これも、写本系が、刊本系の欠脱を手さぐりで補筆した証と見ることができのではないかと思う。

さて、以上のように、刊本系に書乙本の(二)のような脱落本が生じ、それを補筆したものが写本系であるとする、前掲(三)の欠脱を、刊本系の不備とすることはできないことになる。というのは、この欠脱は刊本系共通のものであつて、もしも刊本系の祖本に脱落があつたのなら、当然それは写本系にも受け継がれているはずだからである。従つて、この部分は、前述のように写本系の補筆と見なければならぬであらう。しかし、ここは、刊本系のままでも文章の

続きとしては別に不自然な感じは受けないところで、補筆しなければならぬ必然性が乏しいという点で、この推定には若干の不安が残る。強いて臆測を加えれば、ここは、歳暮にあたつて浮舟の母君のところからねんごろな贈り物の届けられるところで、物きよからぬ尼君たちや下人の喜びが記されているのに、尼君については「まめやかにかなる身のたよりに、仏のかゝる光をみちびき給へるなりけるとよろこび給ふ」とあるだけなので、何か物足りなさを感じたのかもしれない。

四

次に、刊本系と写本系との異同のうち、おもなものを対照して左に掲げる。右側は統類従本。写本系は架甲本をもつて代表させる。

(甲) 写本系の脱落と見られるもの

1 御心にかゝらぬおりなくて、ありしせうとのわらはをば、其後もたび／＼つかはしき。されど(四二下)
御心にかゝらぬおりなくて、・・・・・・・・・・・・・・・・・・。されども

2 いとさゝやかに、をしまたるうはべより、あやしう物あはれなり、まして物の心ゆかしければ、あけてみ給と
いとさゝやかに、をしまたるうはゑ・・・・・・・・・・・・・・・・・・。しければ、あけてみ給と

て(四二〇下)

て

3 かの御心はたむかしにかはらぬつかしきの忍びがたうあはれるにも、我ならざらん人は（四二四上）
彼御こゝち・・・・・・・・・・・・・にも 我ならざらん人は

4 めでまどふも心づきなし、吹すぐる御をい風などは、ましてうたて此世のほかの心ちこそすれ。（四二五上）
めでまどふも心づきなき・・・・・・・・・・・・・こゝちこそすれ。

5 今はものゝ哀もことに覚しるべき御さまに、猶つきせぬ御けしきこそ中々心きよからずと（四二六下）
今はものゝ哀もことに・・・・・・・・・・・・・こそ中々心きよからねと

6 いみじうよろこびてまいりけるを、もてなしありさまもとよりまじらひなれたる人々にも（四二七上）
いみじうよろこびまいりぬ、・・・・・・・・・・・・・れひなれたる人々にも

7 よく侍るべきといへば、心にもあらず打うなづきながら、今はそのほどの心もとなさをば（四三〇下）
よく侍るべきといへば、・・・・・・・・・・・・・心もとなさを

8 御袖もひきはなたず、いみじうない給しこそめもあやに有しか、御まへに（四三一上）
・袖も引はなたず、・・・・・・・・・・・・・御まへに

9 あるにもあらぬさまながらも、ながらへ侍るはふしぎにてなん、そのまゝに命たえなましかば（四三一上）
有・にもあらぬさまながら・・・・・・・・・・・・・たえなましかば

10 かゝるたぐひなきを、いみじうおぼしたれば、行末たのもしげなり、御かどきさいの宮（四三七下）
かゝるたぐひもなきを、・・・・・・・・・・・・・けなり、御門・后宫

これらは、おそらく筆写の際に一行とばして写したのであるう。脱落がだいたい二〇字ないし二五字程度であるのを見ると、原本の字詰めが想像される。また、7は「心」から「心」へ、8は「御」から「御」へと目移りがしたため

の脱落であることは一見して明かである。

(乙) 相互に異同のあるもの

11

こおほい君をなのめならずふかく思ひしめきこえて、
昔の人を・・なのめならず・・思ひしめて、
いかにせんと思ひわたりつゝ、忍びがたうなり行しを
一三上

12

尼君いとどあはれにみ聞えて、僧都のをり給へるに、
あま君いと哀に見聞え給ふ、
・・・・・とき事どもとききかしたてまつりたまへば、いとらうたげにうちうなづきて
・・・・・いとありがたう(四一四下)

ゐたまふ、あまぎみいとありがたく

13

火もえまさりてあやしかりけれども、にはかにあらぬかたへ風吹きをひて、この殿をばよけたれば、をのをめ
火はことごとくしけれど、風の吹きよけてあらぬかたへなれば、このとはたいらになん有ける、小野のめづら
づらかなることとの給て、かたへはまかで給なとす。いみじかりつれど、程なくもえとまりて、世中しづまりて、
なることとのたまひて、人々はまかでたまひなとす。しづまりて名残なくしめやかなるに、君はわた殿にたち出
みなまかでちりなどして、名ごりなくしめやかなるに、君はあけ行空のおかしきに、わた殿にたち出て見給ふと
させ給て、明ゆく空のけしきをかしきを、ながめ入せたまひてわらはめしよせたり。

てかのわらは召よせたり。(四一九上)

14

日比もさぞとたしかにきゝ給しことなれど、猶うつゝとは思ひ給はぬに、げにとさておもはすらん、めづらかに
 日比もさぞとたしかにきこえ給へれど、
 げにさだかなるは、めづらかに
 あさましうおぼす。(四一九下)

あさましうおぼす。

15

今一しほの思そへて、さらになからふまじき心ちなんせしを、
 今一しほ思ひ侘て、さらに夢うつゝともわかかねて、ながらふべしとおぼえざりしに、またかゝるあやしき夢
 のやうなることを(四二二下)
 のやうなる事を

16

むかしより思ひしりにし身なれども、
 昔より人には思ひおとし給し身なりとおもひしりにしいふかひなさなれども、心の色ふかきはかりは、さりとも
 ・かうしも人はあらざりける(四二三上)

人はかうしもあらざりけりと、

17

とうれへ給へる哀さもなをざりならんや、(四二五下)
 ならひたまへりやまたこそ知らねとのたまふに、

18

よしなかるべきことをとの給ふ。
 よしなかるべきこととの給てはづかしげなり。やがて車ひき出していそぎぬ。
 しやりすぐる程にをしとめて、(四二八下)
 ・をしとめてさせて

19 ころまうけの物ども、……さま／＼こちたくて（四三九下）

心まうけの物ども、身づからの御れうきぬわたなどやうの物、さま／＼こちたくて

右のうち、12については、最後の「いとありがたう」以下が、刊本系では僧都のことばになるのに、写本系では尼君のことばになっている。しかし、このことばの中には「大将殿の御さまはつきなき法師ばらなどだにもなれきこえまほしう」というところがあり、僧都のことばと見なければ通じないから、写本系の不備は明かである。しかし、その外の八項は、どちららの本文がよいか、簡単には決めることができない。ただ写本系によらなければ意味が通じないということはなくであるから、初めから述べてきた諸点を考え合わせると、やはり、写本系は刊本系の脱落を部分的に修正したもので、テキストとしては刊本系が古く正しいと考えてよいのではないかと思われるのである。

（註）1 「国語国文」昭和三十年十二月拙稿「山路の露の作者」

- 2 「日本古典全書源氏物語 七」二八六頁註に「古本『うさ』の右旁に「本ノマ、」とあり、意味不通。錯簡があるか。流布本には『なになつねきて』とあり、前段頭註に示した文中、浮舟の歌をさすごとく考へられる。なほ後考をまつ。」とある。
- 3 この錯簡によると、書乙本の原本は袋綴であつたようである。